

## 近代からはじまる北海道と和紙産地の絆

### その2 北海道における大正時代のノリウツギ事情

錦織正智

#### はじめに

明治時代が始まると、紙には新聞、雑誌、義務教育の国定教科書など新たな用途が生まれました。情報の普及、行政や商業、文化活動等など、社会全体のシステムを近代化させる基盤として和紙の需要は大きく伸びました。そして、明治時代末期には機械漉き和紙が登場し、増加する需要に応えました（写真-1）。

213号に掲載した前報「その1 サビタ樹皮の採取とサビタ糊の製造」では、明治時代の和紙産地におけるノリウツギ資源の枯渢と道南地方に興った道外向けのノリウツギ採取事業について述べました。本報の話題は採取事業が全道へ展開する大正時代についてです。また、文中では基本的に「ノリウツギ」を用いますが、古い資料に「サビタ」と使われている場合は「ノリウツギ」と同じ意味で使うことにします。



写真-1 手漉きと機械漉きの和紙生産、機械漉きに使うノリウツギの「ネリ」

左：岩野製紙所（福井県越前市）、中・右：丸あ製紙所（愛媛県中央市）

#### 全道に広がるノリウツギの採取事業

明治時代における道外向けの採取地は主に道南地方でした。やがて、道路や鉄道、港湾などのインフラの整備が進むと採取地は全道に広がりました。例えば、大正時代初期の様子は北海道拓殖銀行が作成した「調査彙纂」の中で次のように書かれています。

近年大阪地方ヨリ本道ニ向ツテサビタ糊ノ採取ニ来ルモノアリ、可成大規模ニシテ大正三年ハ三万六千封度（＝ポンド）十万圓ニ過ザリシガ大正五年ハ一躍一億二千萬封度二百三十万圓ニ達シ（中略）製紙原料ニシテ網走、上川地方ヨリ出ズ（後略）

上の資料から①道外からサビタ糊を目的に人の往来があり、②大正時代の初期には既に網走地方、上川地方でも樹皮の採取が行われていたこと、③採取量が急激に増加したこと、④消費者物価指数をもとに計算すると現在の価値で50億円以上（二百三十万圓）の大きな

産業であったことが分かります。

また、明治時代に本格的な開拓が進められた択捉島にも採取事業は及びました。鹿能辰雄著「択捉島地名探索行」に留別村字老門村の山村地帯では「サビタの皮買います」の広告が出ると皮剥ぎをしたことが書かれています。

採取方法は地域のノリウツギを探り尽くし、新たな採取地を求めるのが普通でした。芦別市史には大正時代に下芦別付近のサビタが採り尽くされて姿を消したとの記録があります。転々とする資源略奪型の採取事業が地域に根付くことはありませんでした。それでも北海道から出荷を続けることができたのは、資源量が豊富であったことが想像できます。

また、大正時代末期の様子は「大日本山林会報」の中で次のように書かれています。

サビタ糊は北海道、渡島、後志、胆振より年々多量に産出して居る此地方  
大正十四年の産額は實に四十万貫（約二萬樽四斗樽を普通とす）此價額約五  
十萬円の多きに達し、（中略）本品は大坂、神戸、土佐、支那の各方面へ移出  
され（後略）

上の資料に「大正 14 年（1925）に支那（当時、中華民国）へ出荷した」との記述があります。日本は第一次世界大戦下にドイツの権益下であった山東半島を占領しますが、その後、大正 11 年（1922）に山東還付条約を受け入れて中華民国へ山東半島を還付しました。大正 14 年には駐屯兵も撤兵していたと思います。中華民国におけるサビタ糊の用途に関する資料を見付けることができませんでした。その頃、道内ではサビタ糊をマッチ生産の接着剤にも使用していたそうなので、彼の地でも抄紙以外の需要があったのかも知れません。

さて、原野や海岸沿いから始まった採取事業は採れる所を探り尽くしながら全道へ広がるのですが、資料を辿ると採取地で収穫量の記録が始まるのは山地で採るようになってからのようです。山地は御料林、国有林、道有林（模範林、公有林）、社寺林、私有林など所有者がはっきりしていたことが理由かもしれません。

また林業関係の統計に見つけることができた古い記録は北海道庁拓殖部作成の年次統計書「北海道森林統計要覧 大正 5 年度」です。この記録で初めてノリウツギ樹皮が「林産物」として扱われます。その中で仕向地には東京、大阪、神戸、高知とありました。

表-1 は仕向地「東京」の項目を切り出したものです。ノリウツギ樹皮の他にガンピ樹皮、カシワ樹皮も並びます。当時、北海道ではシラカンバをガンピと呼んでいました。ガンピ樹皮とはシラカンバの樹皮です。それぞれの用途として、北海道庁作成「北海道森林統計書 第 1 回（大正 3 年度）」の中にガンピは「燃料樹皮」、カシワは「染料樹皮」と記載されていました。

東京に着いたノリウツギ樹皮が届く先までは把握できませんが、「紙幣用紙」を生産し



**写真-2 紙幣用紙の手漉き作業**

出典：大蔵省印刷局「写真でみる 100 年の  
あゆみ」（国立国会図書館所蔵）

ていた手漉き工場「大蔵省紙幣寮抄紙局（王子村）」もその一つではないかと考えています（写真-2）。明治時代には洋紙の生産も始まり、様々な場面で和紙から洋紙への転換が進みました。それでも品位や風格、薄さや丈夫さが求められる用途は和紙の独壇場であり、紙幣用紙の製造が機械化される昭和9年（1934）までは手漉きで製造されていました。

表-1 林産物道外移出（内国）大正5年

第五五 林産物道外移出（内國）（續） 大正五年				
林産物道外輸移出	仕向地	品名	数量	價額
東京		木 材	435,824 石	795,312 円
		経 木	2,212 個	9,916
		柾	1,353 九	2,030
		曲 輪	1,309 個	3,927
		ガンビ樹皮	3,295 貫	132
		カシハ樹皮	43,211 貫	143,362
		ノリウツギ樹皮	131 貫	4,290
		燐寸軸木	7,430 個	89,160
		木 炭	1,180 貫	97

出典：北海道森林統計要覧 大正5年度（国立国会図書館所蔵）

### 道内外における和紙生産事情

明治時代から大正時代までの和紙生産の推移を数字で見てみましょう。明治時代初期の府県の統計資料は信頼性に乏しいことから、明治14年（1881）から大正14年（1925）まで設置されていた農商務省が刊行した「農商務統計表」を参考にします。明治時代に使われた紙の単位「貫」ですが、大正時代に「締」へ変わったことから生産量の比較はできません。そこで変わらぬ単位「生産額（円）」で比較してみます。

明治20年度と大正12年度の値を見ると、美濃紙は53万8639円→566万3135円、半紙は166万3707円→1218万5552円。両和紙それぞれの生産額は約10倍になりました。大正12年の物価水準は明治20年の2.5~3倍であったことを考慮しても、和紙は時代の要請に応えて生産量が大きく増加したことが分かります。また、明治時代から大正時代を全国的に見ると和紙産地は東北地方が衰退し、福島県以南から北九州に集約しました。中でも高知県、愛媛県、香川県、福井県、岐阜県は生産額を大きく伸ばしました。

他方、北海道の和紙事情についてです。北海道開拓使は和紙の生産を試みましたが、暖かい気候を好むコウゾがうまく育たず採算が合わないことから明治15年で事業は終わりました。その後、明治31年に道産和紙に大きな転機が訪れます。函館の石塚又一郎が函館製紙合資会社を設立しました。紙の原料には近隣から買い入れた屑紙と道内で採れるノリウツギを使いました。道内で手に入る材料だけを使って漉き返し紙（鼻紙・ちり紙）を生産

しました。漉き返し紙とは現代のリサイクル紙です。また石塚又一郎は蒸気の力を利用して紙を漉く石塚式製紙機を発明して明治33年に特許を取得します。漉き返し紙は石塚式製紙機を使って小樽、札幌、旭川でも生産されるようになりました。こうして道産和紙は再興することになりました。

### 最後に

明治時代末期には函館港から道外の和紙産地へノリウツギの出荷が始まりました。大正時代になると採取事業は全道で行われるようになり、北海道を代表する林産物になりました。しかし、採り過ぎたようです。大正時代も終わりに近づくと、将来を危惧して道有林ではノリウツギの植栽事業が始まります。続く昭和時代、戦争が始まると農地ではトロロアオイの栽培よりも食糧の増産が優先されるようになりました。そして、北海道から供給されるノリウツギは和紙産地にとってますます掛け替えのないものになっていきます。

### 参考資料

- 芦別市史（1974）p497  
大蔵省印刷局（1972）写真でみる100年のあゆみ  
大脇保彦（1970）明治期における和紙業の地域的展開について 人文地理（22）3：282-311  
鹿能辰雄（1976）択捉島地名探索行：北方風土記 みやま書房 p192  
苫小牧市史 下巻（1976）p1796  
大日本山林会事務所（1926）大日本山林会報  
錦織正智（2025）近代からはじまる北海道と和紙産地の絆 その1 サビタ樹皮の採取とサビタ糊の製造 光珠内季報 213：5-10  
農商務省（1894）農商務統計表 第9次  
農商務省（1913）農商務統計表 第40次第3編  
農商務省水産局（1916）農商務省水産局 編 漁家副業ノ概況 第1次：227  
北海道拓殖銀行（1921）調査彙纂 第4巻 第1号  
北海道庁（1902）殖民公報（9）：56-57  
北海道庁（1913）殖民公報（73）：61-62  
北海道庁（1917）北海道森林統計書 第1回 大正3年度  
北海道庁拓殖部（1918）北海道森林統計要覧 大正5年度

（道北支場）